イルメラ・日地谷=キルシュネライト（ベルリン自由大学）

文学は異郷に根をおろせるのか ―ドイツにおける日本文学の 164 年

今回のフォーラムが提唱する「ともに未来を見据えること」は、本発表では文学に向けられる。最近のイギリスの児童は、本よりも携帯をほしがっているとのことである。ドイツでも日本でも、文学作品を読むことが次第に重要性を失っている現状を考えると、そもそもなぜ文学なのかと自問することもできるだろう。ある国民や言語共同体の精神生活において、文学やその翻訳がどのような役割を果たせるのだろうか。誰が何を、そして何故に読むのであろうか。移入されたテクストが受け入れられるどのようなチャンスがあるのだろうか。何か新しい視野が拓けるのであろうか。しかし、こうした問いに部分的にでも答えるまえに、150 年強にわたる歴史を振り返って現在と未来を考察するために必要な焦点深度を得ることが求められる。

西欧の言語の中で、ドイツ語が日本文学の翻訳ではもっとも長い歴史を誇っていることに驚く人もいるかもしれない。というのもその嚆矢は、まさに同時代の作品である柳亭種彦作『浮世形六枚屏風』(1821 年)のアウグスト・プフィッツマイアーによる 1847 年に出版された翻訳だからである。日本語からの翻訳の歴史がその後どのように展開し、いかなる動向を経てきたかを、統計なども用いながら概観する予定である。出版社の果たした役割もさらなる重要な問題点である。最終的に問われるべきは、ドイツ語圏における日本文学が、これまでの歴史においてエキゾチズム以上のものであったか、あり得たか、である。日本文学が根付いたといえるのだろうか。もしそうならば、それはどのように分かるのであろうか。

本発表は、はじめの問いかけを日本におけるドイツ文学の状況と比較しながらともに議論するための土台と可能性を提供することを目指している。

****

イルメラ・日地谷キルシュネライト

1948 年生まれ。1991 年より日本学教授（文学と文化学）、2010 年よりベルリン自由大学フリードリヒ・シュレーゲル大学院文芸学研究科長。1996 年から 2004 年までドイツ日本研究所長。研究分野：近現代日本文学など。日本文学の翻訳、研究書を多数出版。インゼル出版 Japanische Bibliothek シリーズ 34 巻編者(1993-2000)、イウディツィウム出版 Iaponia Insula 日本文化社会研究シリーズ編者（既刊 25 巻）など。2010 年 7 月、「旭日中綬章」受勲。